

モーツアルトと民謡（1）
——スコットランドの歌のスケッチ Sk1785a——

野口秀夫

1. はじめに

鳥代：モーツアルトの作品表^{注1}にスコットランドの歌のスケッチ Sk1785a [bei Skb1785t] というのがありますが、モーツアルトはスコットランドに行ったことがないので不思議に思われます。どのような曲なのでしょうか。

犬輔：その前に Sk 番号や Skb 番号、そして bei の意味を確認しておく必要がありますよ。

教授：Sk はスケッチ番号だ。年号とアルファベットの組合せで 1 曲のまとまりを表すが、年号あるいはアルファベットが正確に作曲年代あるいは作曲順を表しているとは限らない。Skb はスケッチ葉番号で、年号が番号の基本になっているがこれも正確に年代を表しているとは限らない。ギリシア文字枝番のスケッチ葉は完成作品の中にスケッチ葉がある場合に使われている。(アルファベット枝番の場合は単独のスケッチのみが書かれた葉である)。bei は包含関係にあるときに使用される^{注2}。

犬輔：Skb1785t の t はギリシア文字のイオタですね。ということは Sk1785a が「完成作品」と「包含関係」にあるということでしょう。ではその完成作品とは何ですか。

教授：《フィガロの結婚》K.492 である。《フィガロの結婚》のスケッチ葉としては次の 9 葉が知られている。Skb1785δ, Skb1785ε, Skb1785ζ, Skb1785η, Skb1785θ, Skb1785ι, Skb1785κ, Skb1785λ, †Skb1785μ である^{注3}。ここで†マークは紛失してしまった葉を意味する。

鳥代：つまりスコットランドの歌のスケッチ Sk1785a は《フィガロの結婚》のスケッチ葉の一つ Skb1785t に間借りしてスケッチされているということなのですね。

教授：じつは Skb1785t にはオットー・ヤーンの筆写譜が残されているが、自筆譜は 1929 以来紛失していた。それが一旦 2013 にベルリーンのシュタルガルト・オークションに現れ、その後 2021 にパリでドルーオ・オークションに出品された。そのときに Sk1785a のアクリシミリがウェブサイトに載ったのだ^{注4}。(サイトには落札されたという表記はない)。

犬輔：その葉には《フィガロの結婚》のどの部分のスケッチが書かれているのですか。

教授：表面 (recto) に第 1 幕第 2 場の第 3 番フィガロのカヴァティーナ Se vuol ballare, Signor Contino の終結部 3 小節とプレストの後奏 9 小節が書かれている(これは NMA の p.628 にヤーンの筆写譜に基づいた図 1 の楽譜が載っている)^{注5}。表記は最終スコアとほとんど違いがないが、書き換えるために抜き取られた葉と言えよう。

図 1 フィガロのカヴァティーナのスケッチ K.zu 492/03 [bei Skb1785t]

鳥代：そしてその裏面（verso）がスコットランドの歌のスケッチ Sk1785a なのですね。NMA にはまだ楽譜が載せられていませんので、オークションサイトのファクシミリは貴重です（図2）。透かしは Wk79 だと報告されています。



図2 スコットランドの歌のスケッチ Sk1785a 自筆譜

犬輔：モーツアルトが書いているタイトル *Arie scocesi* [アリエ・スコチェージ] は *Aria scocese* の複数形で、「スコットランドの歌」のことでしょう。モーツアルトは *scocese* と書いて語末の e に i を上書き修正しているようにも、していないように見えます（図2拡大部）。

鳥代：因みにヨハン・フィーリップ・バッハ Johann Philipp Bach (1752–1846) には「スコットランドの旋律と変奏 *Aria scotese con variazione*」という曲があります（図3）^{注6}。

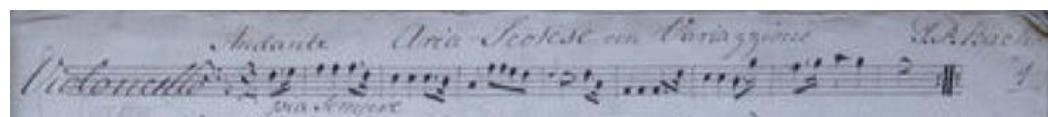


図3 ヨハン・フィーリップ・バッハの「スコットランドの旋律と変奏」手稿譜

教授：現代のイタリア語では *scozzese*（複数形は *scozzesi*）が一般的だが、当時の綴りには *scocese* や *scotese* のように揺れがあったということだ。

犬輔：Sk1785a の自筆譜（図2）にはスコットランドの歌が2曲あるようです。

譜例1 Sk1785a/1 開始部

譜例2 Sk1785a/2 開始部

鳥代：これらのスコットランドの歌はどこから引用なのでしょうか。

教授：それは諸君たちに調べてもらおう。

2. スコットランドの歌

犬輔：NMA の歌曲卷の校訂報告（1964）に「モーツアルト自身による歌曲の転写」という項があり^{注7}、楽譜は載せられていませんが、解説だけはなされていました。抜粋します。「モーツアルトがスコットランドの歌のメロディの編曲に関心を持っていたことはこれまで知られていないかった。オットー・ヤーンのコピーで私たちに伝えられたモーツアルトのスコットランドの歌または歌のメロディの記録がこのことを示している。[中略] 最初の曲は、モーツアルトによる 16 小節でスコットランドの曲「ロスリン城 Roslin Castle」である。J. C. ディックによると、この曲は 1746 にウィリアム・マクギボン William McGibbon (1690–1756) の『スコットランドの調べ Scots Tunes』の中で「グラームス村の家 The House of Glams」というタイトルで最初に記録された。[中略] モーツアルトがクラヴィーアのみで記した 2 番目の曲はスコットランドの歌「メアリー女王の嘆き Queen Mary's Lamentation」である。」

2.1 スコットランドの歌「ロスリン城」

鳥代：「グラームス村の家」と「ロスリン城」の最古の印刷版を探しましたが、1746版は参考できませんでした。以下にそれぞれ1762版⁸とc.1768版⁹を示します（マクギボンは1756年に亡くなっていますから1746版があるのは間違いないと思われます）。なお図5と図7の間には付点の記譜に異同がありますがほぼ同じ曲としていいでしょう。また反復記号の解釈としては8小節ずつの楽節をAABBAで演奏することでしょう。

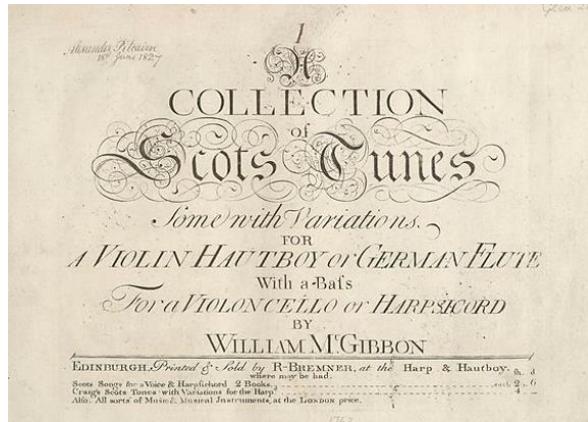


図4 A Collection of Scots Tunes [1762] タイトル



図5 The House of Glams (A Collection of Scots Tunes [1762], Part 2nd, p.31)

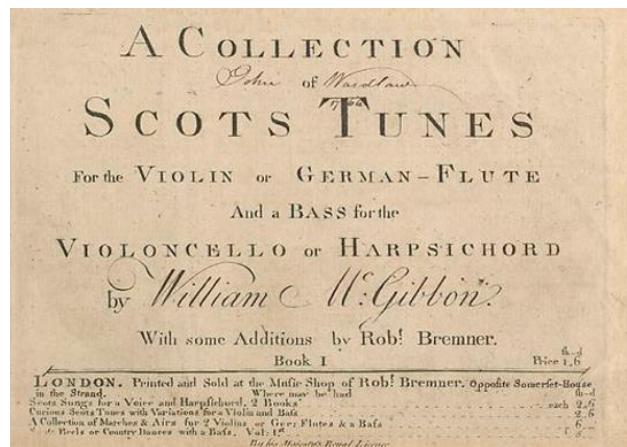


図6 A Collection of Scots Tunes [c.1768] タイトル



図7 Rosline Castle (A Collection of Scots Tunes [c.1768], Book II, p.35)

犬輔：ロスリンには Rosland, Rosline, Roseland, Roslin, Rosslyn の表記があるそうです^{注10}。

教授：ロスリン城は 14 世紀初頭（1304頃）ロスリンの戦いの直後にエディンバラの数マイル南西、エスク川の北岸の高台にウィリアム・セントクレア卿によって建てられた岩と滝の城だ。長い年月を経て、2 度の火災に耐えたが、最終的には 1650 にクロムウェルの軍隊によって破壊された^{注10}。「ロスリン城を訪れると、たとえ岩の上に築かれたとしても、自分の仕事を永続させようとする人間の努力は崩れ、衰退していくことを目の当たりにする。それと対比して若さと自然の新鮮さの永遠の再生を考えるのだ」という捉え方が詩人口バート・バーンズに影響を与えたのだろうと慮る人もある^{注10}。



図 8 ロスリン城の現況

犬輔：次のような言い伝えもありました。「城の王女の一人には 75 人の侍女がいて、そのうち 53 人は貴族の一員でもあったという記録が残っている。全員がヴェルヴェットとシルクのガウンを美しく着飾っており、また、金や他の宝石も身に着けていた。この王女がエディンバラの彼女の家を訪れたときには、馬に乗った 200 人の男たちを伴い、夜にはさらに 80 個の松明を携えていた。城には莫大な財宝を守る“眠りの貴婦人”的幽霊が出るという伝説もある。下層階に聞こえるラッパの音で目覚めると、彼女が現れて財宝を明らかにし、そのとき城は廃墟からかつての栄光を取り戻すだろう」^{注10}。

鳥代：オリジナルの歌詞は残っていないそうですが、デイヴィッド・ハード David Herd (1732–1810) の『古代および現代のスコットランドの歌 Ancient and modern Scottish songs』(1776)^{注11}に記載の歌詞（作詩者不明）と、もう一つ、年代不明のリチャード・ヒューイット Richard Hewit (? -1794) による歌詞^{注12}があります。それぞれ表 1、表 2 に翻訳しておきましょう。

表 1 「ロスリン城」の歌詞（『ハードの選集』1776 より。作詩者不明）

From Roslin castle's echoing walls Resound my shepherd's ardent calls, My Colin bids me come away, And love demands I should obey. His melting strain and tuneful lay, So much the charms of love display, I yield—nor longer can refrain To own my love, and bless my swain.	ロスリン城の反響する壁からは 私の羊飼いの熱烈な叫び声が響き渡ります。 彼コリンは私に行こうと命令し、 愛は私に従うべきだと要求します。 彼の口調が和らぎ、歌の旋律に、 愛の魅力がたっぷりと表れているので、 私はもう自分の愛を自分のものにし、 恋人に同意することを押えることはできません。
No longer can my heart conceal The painful pleasing flame I feel, My soul retorts the am'rous strain, And echoes back in love again; Where lurks my songster? from what grove Does Colin pour his notes of love? O bring me to the happy bow'r, Where mutual love may bliss secure.	もう私の心は隠すことができません 私が痛みを伴う心地よい炎を感じています。 私の魂はその甘い緊張に反発し、 再び愛にこだまします。 私の歌手はどこに潜んでいるの？ どの木立から コリンは愛の調べを注ぐのでしょうか？ おお、私を幸せな木陰へ連れて行ってください、 そこではお互いの愛が幸せに保たれるでしょう。
Ye vocal hills that catch the song, Repeating, as it flies along, To Colin's ear my strain convey, And say, I haste to come away. Ye zephyrs soft that fan the gale, Waft to my love the soothing tale; In whispers all my soul express, And tell, I haste his arms to bless.	歌声を受け入れる丘よ、 それが飛び交うにつれて、 コリンの耳に私の調べが伝わり、 私は急いで行きましょうと言います。 強風を退ける柔らかなそよ風よ、 私の愛に心地よい物語を漂わせてください。 ささやきの中で、私の魂のすべてを表現し、 伝えます、私は彼の腕に急いで従うと。

表 2 「ロスリン城」の歌詞（ヒューイット作詞）

'Twas in that season of the year, When all things gay and sweet appear, That Colin, with the morning ray, Arose and sung his rural lay. Of Nannie's charms the shepherd sung: The hills and dales with Nannie rung: While Roslin Castle heard the swain, And echoed back his cheerful strain.	一年の中でも、この季節は、 陽気で心地よいものがすべて現れます コリンは朝の光とともに 起床し、田舎の平穏な歌を歌いました。 ナニーの魅力についてその羊飼いは歌い、 ナニーのいる丘や谷は鳴りました。 ロスリン城が恋人の声を聞き、 彼の陽気な調べはこだました。
--	--

Awake, sweet muse! The breathing spring With rapture warms: awake, and sing! Awake and join the vocal throng, And hail the morning with a song: To Nannie raise the cheerful lay; O, bid her haste and come away In sweetest smiles herself adorn, And add new graces to the morn!	目覚めよ、優しいミューズ！歓喜に満ちた 息づかいの春が暖まる：目覚めよ、そして歌え！ 目覚めて声の群れに加わり、 そして歌で朝を迎える。 ナニーに向って陽気な歌の調子を上げてください。 おお、彼女を急がせ、行きましょう 彼女自身が飾った最高に優しい笑顔で 朝に新たな恵みを加えてください！
Oh, come, my love! Thy Colin's lay With rapture calls: O, come away! Come, while the muse this wreath shall twine Around that modest brow of thine. O! hither haste, and with thee bring That beauty blooming like the spring, Those graces that divinely shine, And charm this ravish'd heart of mine!	おお、来てください、愛する人よ！コリンの歌が 歓喜に叫ぶ：おお、行きましょう！ さあ、ミューズがこの花輪をあなたの控えめな額に 巻き付けるにまかせて来てください。 おお！急いであなたと一緒にもたらしてください、 春のように咲くその美しさと 神聖に輝く恵みを そして私のうつとりした心を魅了してください！

2.2 スコットランドの歌「メアリー女王の嘆き」

犬輔：「メアリー女王の嘆き」が掲載されている出版物として、上述のNMA校訂報告ではC.エリオット&T.ケイの『カリオペ Calliope, or the Musical Miscellany』(1788)^{注13}が挙げられていますが、Sk1785aのスケッチを1785とするなら、出典とするには辻褄が合いません。

教授：スケッチ番号の年号が必ずしもスケッチされた年と一致するとは限らないことにくれぐれも気を付けるように。

犬輔：それにしても1788は遅すぎますよ。

鳥代：もっと古い例を探しましょう…。あつたわ。リチャード・ジョンソンの『黄金のバラの花冠』(1659)^{注14}に「フィリップ王の不親切な出発に対するメアリー女王の嘆きの訴え。彼の不在中に彼女は病気になり亡くなった」というバラードが記載されていました(図9)。そのバラードは「クリムゾンのヴェルヴェット」の調べで歌われると書かれているわ。

THE LAMENTABLE COMPLAINT OF QUEEN MARY FOR THE
UNKIND DEPARTURE OF KING PHILIP, IN WHOSE
ABSENCE SHE FELL SICK, AND DIED.

The tune is, "Crimson Velvet."

—
MARY doth complain;
Ladies, be you moved
With my lamentations
And my bitter moans:
Philip King of Spain,
Whom in heart I loved,
From his royal queen
Unkindly now is gone.

図9 The Lamentable Complaint of Queen Mary (The Crown Garland of Golden Roses, 1659)

犬輔：メアリー女王はイングランド女王のメアリー1世で、フィリップ王はスペインのフィリペ2世ということになります。この歌は17世紀に人気がありましたが、1558のメアリー女王の死後すぐに書かれた可能性があると言われています^{注15}。

鳥代：でも「クリムゾンのヴェルヴェット」の調べ(図10)^{注16}は、全く違う曲ですし、単にメアリー女王の嘆きという名称が共通しているというだけで——スコットランドの歌にイングランド女王が歌われるのは不自然でもあり——モーツアルトのメロディの元曲とは言えないわね。



図10 Crimson Velvet

犬輔：『スコットランドの音楽ミュージアム』(1787~1803)にはロバート・バーンズが詩を書いたとされる「スコットランド女王メアリーの嘆き Mary Queen of Scots Lament」が載っています(図11)^{注17}。こちらはイングランド女王ではなくスコットランド女王のメアリー・スチュアートのことになります。でも、これもモーツアルトのメロディとは異なっています。

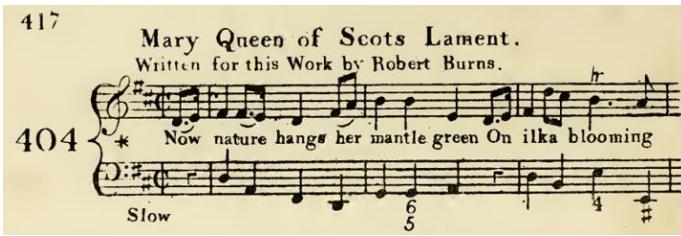


図11 Mary Queen of Scots Lament (Scots Musical Museum, Vol.5, p.417)

鳥代：わたしはトンマーズ・ジョルダーニ Tommaso Giordani (c.1730~1733-1806) が 2Vn, Va, Voice, Bs の編成で編曲した「メアリー女王の嘆き」をテンドウッチが歌ったという楽譜を見つけました。出版年は明記されていませんが大英図書館の書誌情報では 1782 となっています^{注18}。

教授：そのタイトルページ(図12)にはバッハ・アーベル・コンサートでなく、アーベル・コンサートと書かれているので、J.C.バッハの亡くなった 1782.1.1 の後にテンドウッチが歌ったことが分かる。だが、作曲の時期はもっと前であろう。

犬輔：『ドメニコ・コッリの歌唱論』第3巻^{注19}の 71 頁に所収の「メアリー女王の嘆き」には“ジョルダーニ氏作曲 composta dal sigr. Giordani”と書かれていますが、テンドウッチへの言及はありません(図13)。出版年は明記されておらず、のちの研究資料では c.1779 あるいは c.1781 の出版と言われています^{注20}。

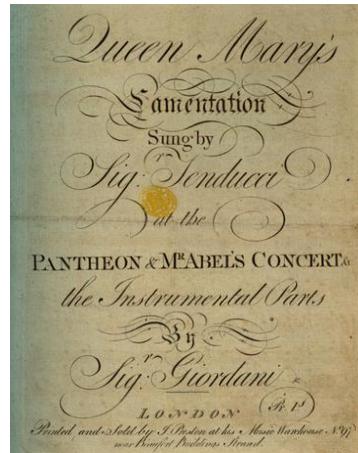
図12 「メアリー女王の嘆き」
ジョルダーニ/テンドウッチ

図13 Queen Mary's Lamentation (Domenico Corri's Treatises on Singing, Vol. III, p.71)

鳥代：ジョルダーニよりも古い資料が見つかるまでは、ジョルダーニのメロディ（図13）がモーツアルトの元曲になっていると考えておいていいでしょう。一方で、少なくとも歌詞は——図12や図13の年代が不正確であっても——1783秋までにはすでに“お馴染みの歌 A favourite song”になっていたことがThe Scots Magazine, Vol. 45の「詩作品 Poetry」を紹介する記事から分かります（図14）^{注21}。歌詞の翻訳を表3に示しましょう。

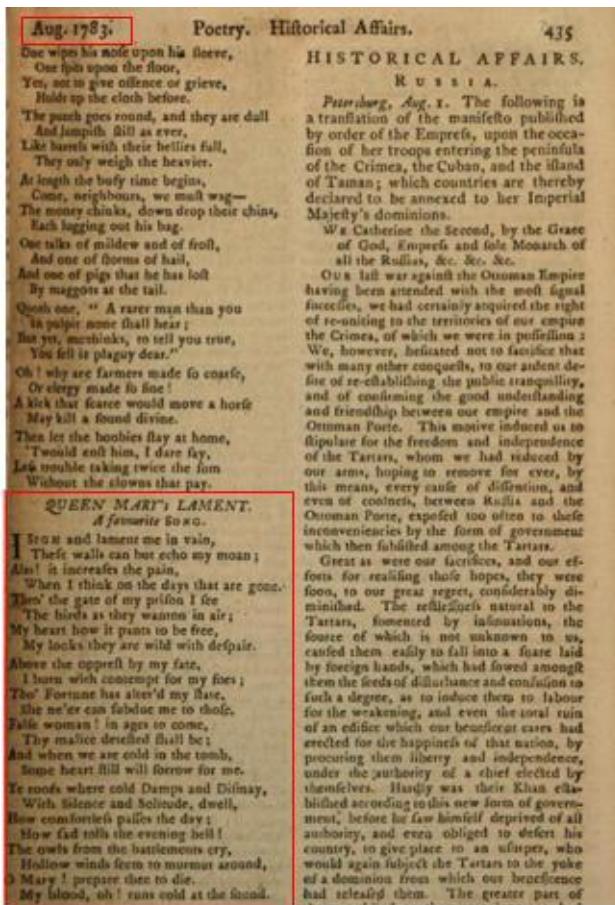


図14 The Scots Magazine, Vol. 45, 1783, p.435

表3 「メアリー女王の嘆き」の歌詞（作詩者不明）

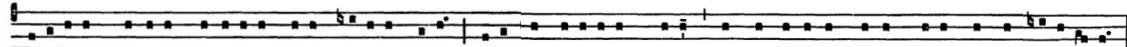
I sigh and lament me in vain, These walls can but echo my moan; Alas, it increases my pain When I think of the days that are gone. Thro' the gate of my prison I see The birds as they wanton in air; My heart how it pants to be free, My looks they are wild with despair. Above, tho' opprest by my fate, I burn with contempt for my foes; Tho' fortune has altered my state She ne'er can subdue me to those; False woman, in ages to come Thy malice detested shall be; And when we are cold in the tomb Some heart still will sorrow for me. Ye roofs, where cold damps and dismay With silence and solitude dwell; How comfortless passes the day, How sad tolls the evening bell. The owls from the battlements cry, Hollow winds seem to murmur around "O Mary, prepare thee to die", My blood it runs cold at the sound.	私はため息をつく。嘆いても無駄で、これらの壁は私のうめき声をこだまするほかない。 ああ、過ぎ去った日々のことを考えると痛みが増します。 私の牢屋の門を通ると、鳥たちが気ままに空を飛んでいるのが見えます。 私の心は自由になろうとあえぎます、私の姿は絶望で荒れ狂っているように見えるでしょう。 何よりも、運命によって抑圧されたとしても、私は敵に対する軽蔑の心に燃えています。 幸運が私の状態を変えたとしても、彼女は私をそれらに屈服させることはできません。 偽りの女よ、これから時代にあなたの悪意は憎まれるだろう、そして私たちが墓の中で冷たくなっても、いくばくかの心は私のために悲しむだろう。
--	---

犬輔：やはりスコットランド女王メアリー・スチュアートのことでしたね。イングランド女王エリザベス1世の王位を脅かす存在として捕らえられ19年間の幽閉の後、1587に処刑されています。後日談ですが、この事態を受けて、スペイン王フェリペ2世は無敵艦隊をイングランドへ派遣し、アルマダの海戦（1588）に繋がりました。

鳥代：ところで「メアリー女王の嘆き」という内容に変ホ長調というものは明るすぎる調性ではないでしょうか。

教授：前述の『カリオペ Calliope, or the Musical Miscellany』（1788）はジョルダーニの楽譜（図13）から前奏・間奏・後奏が省かれている形なので12+12=24小節であり、変ホ長調であるが、それ以降に伝わっている調べの多く^{注22}は同じメロディのト長調であり（小節数は24、25、40小節などがある）、明るさの点においては同じ疑問を抱えている。

犬輔：でも冒頭がグレゴリオ聖歌の「エレミアの哀歌」に似ていることは偶然ではないでしょう。



Cogi-távit Dóminus dissipáre mórum fí-li-ae Sí-on : teténdit funculum sú-um, et non avérít mónum sú-am a per-di-ti-ó-ne :
主はシオンの娘の城壁を荒れさせようと決め、繩でこれを測り、これを滅ぼして手を引かれなかった。墨と城壁は悲しみ嘆き、これらは共に崩れ落ちた。

図16 第6旋法のグレゴリオ聖歌例「エレミアの哀歌」

教授：いい指摘だ。「メアリー女王の嘆き」のメロディを用いて「エレミアの歌」と名付けられた歌詞が1790に出版されているから（図17）^{注23}、そのように聴き取った人もいるのだ。

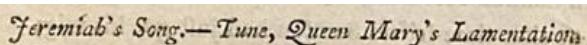


図17 「エレミアの歌」—「メアリー女王の嘆き」の調べで

鳥代：ということは、作曲者は明確な意識の下にグレゴリア聖歌を織り込んだということ？

教授：グレゴリオ聖歌はローマ・カトリックで歌われてきたものだ。メアリー女王はカトリックであった。プロテスタントのエリザベス1世との確執には宗教問題もあった。

犬輔：グレゴリア聖歌を長調の曲に仄めかしで入れたというのは、曲の普及への配慮でしょう。あからさまではないゆえに民謡のリストに載ることができたということでしょうね。

鳥代：どうやら「メアリー女王の嘆き」はジョルダーニ自身の創作なのかも知れません。

教授：脱線するが、「カーロ・ミオ・ベン」（1783）の作者は最近このトンマーゾ・ジョルダーニ（図18）であろうとされるようになった^{注24}。だが父親あるいは若いジュゼッペ・ジョルダーニ Giuseppe Giordani (1751–1798)（図19）であるとの説も全く否定されたわけではない。



左図18
Tommaso
Giordani

右図19
Giuseppe
Giordani

3. モーツアルトによるスコットランドの歌スケッチ

3.1 「ロスリンの城」のスケッチ K.1785a/1

鳥代：自筆譜から「ロスリンの城」のスケッチ K.1785a/1 を淨書して譜例3に示します。

譜例3 「ロスリンの城」のスケッチ K.1785a/1 (♪)

図15
Marie
Queen
of Scots
by Sir
John
Medina

犬輔：ホ短調、4/4拍子、 $8+8=16$ 小節、付点八分音符+十六分音符が11か所という元曲（図7）と一致しています。トリルがない、あるいはスラーがないのはスケッチのゆえでしょう。バスの記譜もなされていません。

鳥代：きちんと曲の終わりまで記譜されているので断片とは言えません。何かに利用するために記憶違いを避けるために書き留めておいたものと思われます。

犬輔：民謡としての「ロスリンの城」の現代演奏を聴くと、細かい部分はそれぞれ音型が変形されています^{注25}。その意味で譜例3と図7の音型の差がモーツアルトのジェスチャの特徴によるものであるとは断定できません。

3.2 「メアリー女王の嘆き」のスケッチ K.1785a/2

鳥代：モーツアルトは「メアリー女王の嘆き」の上段を書き上げ、続いて下段のバスを9小節の2拍まで書いたところで、以後の部分に取り消し線を引きました（譜例4）。

譜例4 「メアリー女王の嘆き」のスケッチ K.1785a/2 修正前 (♪)

犬輔：取り消し線を復元すれば、譜例4は変ホ長調、3/4拍子、12小節の曲ですね。元曲（図13）は前奏8+歌前半12+間奏4+歌後半12+後奏4小節ですから、そのうちの歌前半12小節と合致しています。

鳥代：でもモーツアルトは取り消し線を引いたあと、新たな続きを譜例5のように書きました。

譜例5 「メアリー女王の嘆き」のスケッチ K.1785a/2 修正後 (♪)

犬輔：18小節になったのですね。終わりの3小節のうち2小節は譜例4と同じですので、7小節分が新たに追加されることになります。つまり $18-(12+3+2)=7$ 小節です。

鳥代：そのような捉え方もありますが、譜例4が $6+6=12$ 小節になっていたのに対して、譜例5では $6+6+6=18$ 小節となっています。つまり、真中の6小節が追加の楽句で、それはモーツアルトが創作した変奏ではないでしょうか。歌詞に無関係の器楽としてのスケッチだとすればこのような挿入は可能でしょう。

犬輔：元曲（図13）にはスコットランド歌曲の特徴の一つであるスコッチ・スナップ（逆付点リズム）が多用されていますが、モーツアルトはこのリズムを一切書き写していません。これはどういうことでしょうか。

教授：モーツアルトは初期のコンサートアリアで先行作品を参考にしてこのリズムを使ったことが何回かあるが、器楽曲ではさらに例が少なく、特に上行音型での使用は交響曲へ長調K.19aの第1楽章くらいであった^{注26}。そもそも英語の歌詞は母音が長いためスコッチ・スナップが効果的だが、器楽だけで演奏する場合はロンバルディア・リズムと称することになり、効果の有無を別途検討する必要がある^{注27}。つまり歌曲を器楽曲へと移す場合、左から右へコピーすればいいというものではないのだ。

鳥代：モーツアルトは原曲（図13）の3音目の二分音符を連打の四分音符にしています。これは「エレミアの哀歌」（図16）に即した意識的な変更であると思われます（譜例6）。「エレミアの哀歌」による他の例としてフリーメイソン葬送音楽 ハ短調 K.477 (1785)（譜例7）の音列^{注28}を挙げておきましょう。音高は異なりますが音の進行がそっくりです。



譜例6 「メアリー女王の嘆き」のスケッチ K.1785a/2 冒頭



譜例7 フリーメイソン葬送音楽 ハ短調 音列

4. モーツアルトによるスコットランドの歌のスケッチの用途について

犬輔：上述のNMA校訂報告では「モーツアルトのメモでは、その意図された目的について結論を出すことができないが、おそらく一連の変奏曲や即興演奏の基礎として意図されていたと考えられる」とあります。たしかに歌唱声部を記譜するならハ音記号が使われるはずで、ト音記号で大譜表となっているところからクラヴィーアの譜面であることは間違いないと思われます。

鳥代：参考例として年代は不明ですがドゥシーク（ドウシェクとも）Jan Ladislav Dussek (1760–1812) に「ロスリン城」による変奏曲 Rosline Castle with variations for piano ハ短調 Craw 100 というクラヴィーア曲があります^{注29}。因みにドゥシークはロンドンで前述の楽譜出版社Corriに協力して1794に会社を興しています（1804に破産）^{注30}。モーツアルトはこのようなスタイルの変奏曲を想定していたのでしょうか。

犬輔：J.C.バッハでは「黄色い髪をした少年」がクラヴィーア協奏曲変ロ長調 Op.13, No.4 = War C65 (1777) のフィナーレに、「私の父を見ましたか Saw ye my father」が、クラヴィーア協奏曲ニ長調 Op.13, No.2 = Warb C63 (1777) のアンダンテ楽章に引用されています^{注31}。このように器楽曲への引用のための下書きという候補も考えられます。

5. ほかの作曲家によるスコットランド民謡の編曲

鳥代：さらにJ.C.バッハは5曲のスコットランドの歌にオーボエあるいは2本のフルートと弦楽の簡単な伴奏を付けています。「バレンデンの丘 The Braes of Ballenden」Warb LH1 (1779上演)、「カウデンノウズの箒 The Broom of Cowdenknows」Warb LH2、「私はあなたを離れることはない I'll never leave thee」Warb LH3、「ロッホアーバーLochaber」Warb LH4、「黄色い髪をした少年 The yellow-hair'd Laddie」Warb LH5 (紛失) がそれです^{注32}。

教授：J.C.バッハの編曲を歌ったのもやはりテンドウッチであった。次のような評価がある。「テンドウッチがエдинバラで知ったスコッチソングの両方〔具体的な作品は不明確〕をバッハが編曲したという事実は、編曲がバッハのアイデアではなくテンドウッチのアイデアであったことを示唆している。イタリア人のカストラートがスコットランドの言葉を歌うという考えを聞くと驚かされるが、1770年代にこれを滑稽だと感じた人がいたという形跡はない。それどころか、多くの人が深く感動した」^{注33}。

犬輔：時代が下るとスコットランドの歌に様々な楽器による伴奏を付けた同様の編曲作品が続々と現れます。作曲家としてはハイドン、ベートーヴェン、チャーチル、コジェルフ、メンデルスゾーン、ヴェーバーなどが挙げられ、彼らはすべて英國の楽譜商からの依頼で民謡の編曲を行ったといいます。

鳥代：解説を引用しましょう。「ロンドン滞在中にハイドンはウィリアム・ネイピアがスコットランド民謡集の売れ行き不振で危機に陥っていると知って、彼を援助するためにスコットランド民謡の編曲を行い、1792に出版した。これが好評だったため、最晩年まで次々に編曲を行った。その多くはジョージ・トムソンからの依頼によるもので、トムソンはほかにプレイエルやベートーヴェンにも編曲を依頼している。ハイドンの最初の編曲はヴァイオリンと数字つきバスの伴奏によるものであったが、後のものにはチェロが加わっている。ハイドンによる編曲は2005に429曲のリストが作られ、その全貌がようやく明かになった。ただしハイドン自身でなく門人に編曲させたものも混じっているという」^{注34}。

犬輔：「英國の楽譜商人ジョージ・トムソンは、各国で民謡への関心が高まる中、自ら収集したスコットランドやアイルランドの民謡を、プレイエル、ハイドン、ベートーヴェンなどの売れっ子作曲家による優れた編曲で出版しようとした。19世紀初め、ナポレオン戦争による不況でパトロンからの年金が減っていたベートーヴェンにとっても、これは良い“お仕事”となり、ソナタなどの創作のかたわら、着々と海の向こうに編曲を納品した。1809から1820にかけて、彼が手がけた民謡編曲は実に179曲を数える」^{注35}。

6. モーツアルトの英国旅行計画

鳥代：他の作曲家の例を見てきましたが、モーツアルトの場合、Sk1785a は歌うための曲としてスケッチしたのではなく、変奏曲の主題として、あるいは器楽曲へのエピソードとして引用する目的であったという可能性をますます強く感じるようになりました。

教授：では次にモーツアルトがどのような機会にスコットランドの歌を知り、どのような場所でその引用作品を披露するつもりだったかを考えてみたまえ。

犬輔：モーツアルトにスコットランドの歌を教えたのは周辺にいた英国人が候補となります。『フィガロの結婚』作曲以降（1785以降）に限定すれば、アンナ・ストラーチェ、マイケル・ケリー、トマス・アトウッドが挙げられます。

教授：どのような場所でその引用作品を披露するつもりだったのかね。

鳥代：モーツアルトは英国旅行を計画していたのでロンドンの演奏会での披露ではないかと思われます。

教授：ではその計画の詳細を調査しなさい。

鳥代：はい、英国旅行の計画に関する資料をまとめましょう。

1782.8.17 付けモーツアルトから父宛

ぼくの考えでは、今度の四旬節にはパリに行こうと思っています。[中略] このところ毎日、フランス語の練習をしています。それに英語のレッスンもすでに三回受けました。——三ヶ月もすれば、英語の本をなんとか読んで理解できるようになると思います。

1786.11.17 付けレーオポルトからナンネル宛

私がとても手厳しい手紙を書かなければならなかつたことは、おまえにもたやすく想像できるだろう。というのは、彼は謝肉祭なればにドイツを通って英國に旅行をしたいので、二人の子供の面倒を私に見てくれるかと大変な申し入れをしてきたからです。[中略] これは確かに悪いことではありません。——彼らは安心して旅行ができるでしょうし、——死ぬこともあります。——英國に留まれるかも知れません。—— —— そうしたら私が子供たちを連れて彼らのあとを追って行けるとでも。[中略] もうたくさんです！

1786.12.26 付け『プラハ中央郵便局時報』

著名な作曲家モーツアルト氏は来春ロンドンに向けて旅立つ予定であり、同地に対してきわめて有利な提案を行っている。彼はパリ経由の旅程をとることであろう。

1787.1.12、レーオポルトからナンネル宛

おまえの弟の英国旅行についての話は、ウィーン、プラハ、ミュンヘンから今も確認中です。

1787.3.2 レーオポルトからナンネル宛

おまえの弟については、プラハ宛に手紙を書いても返事がなかったが、彼が再びウィーンに戻つていることが分かりました。彼はプラハで 1,000 グルデンを稼いだこと（と彼らは言っていました）、彼の一番最近の男の子であるレオポルドが亡くなつたこと、そして私がもう話したように、彼は英國に旅行したいと思っていますが、彼の生徒が事前にロンドンで何か確実なもの、つまりオペラの脚本や定期演奏会などの契約を手配しておくべきだということを言っていました。ストラーチェ夫人と仲間みんながこのテーマに関する壮大な話を彼に語ったでしょうし、そもそも一緒に英國に行くという考えを彼の中に目覚めさせたのも間違ひなくこれらの人々と彼の弟子でした。しかし、私が彼に父親らしい手紙を書いたのは、夏のこの旅では何も稼げず、間違つた時期に英國に到着することになる、これを引き受けるにはポケットに少なくとも 2,000 グルデンが必要だということ、そして最後に、彼はロンドンでの契約という確実なものをまだ持つていなかつたので、少なくとも最初は、彼のすべての能力にもかかわらず、ある程度の窮屈に苦しむ危険を冒すだろうということを書いたあと——彼は落胆したのだ。なぜなら歌手の兄【スティーヴン・ストレース】が今回オペラを書くことになろうからです。

犬輔：この間に 1787.2.23 にアンナ・ストラーチェの告別演奏会があり、そして 1787 の春にはアンナ・ストラーチェ、マイケル・ケリー、トマス・アトウッドが英國へ帰つて行きました。モーツアルトの計画は明らかに彼らと一緒に英國に渡ることでした。

鳥代：結局、英國行きを諦めたモーツアルトは、以後 1787.3.30 にクロナウアーへの記念帳に英語で記入、1787.4.24 にもヨーゼフ・フランツ・フォン・ジャカンの記念帳に英語で記入するという程度の英語との付き合いになつてしましました。寂しかったことでしょうね。

犬輔：気を取り直して、『フィガロの結婚』の上演日程も見ておきましょう。ヴィーン初演は 1786.5.1 でヴィーン最後の上演は 1786.12.18 でした。一方、プラハでの上演に立ち会うためにモーツアルトは 1787.1.8 から 1787.2.8 頃までヴィーンを不在にしました。

鳥代：以上の資料の「同地 [ロンドン] に対してきわめて有利な提案を行っている」という記事が書かれた 1786.12.26 までには下準備が進んでいたものと思われます。したがつてスコットランドの歌を教えてもらって書き留めたのはその頃までなのではないでしょうか。

7. まとめ

教授：では結論をまとめてもらおう。

鳥代：1785から1786.12.26の間に、英国旅行を念頭に、ロンドンでスコットランドの歌を引用した器楽作品を披露する準備の一環として、おそらくトマス・アトウッドにスコットランドの歌を教えてもらい、スケッチ Sk1785a を残したのだと思われます。

教授：アンナ・ストラーチェやマイケル・ケリーでないと思われる理由は何かね。

犬輔：ジョルダーニの「女王メアリーの嘆き」が発表されたとされる c.1779 あるいは c.1781 以前から、既に二人とも英國を離れ、イタリアで活躍していたからです。トマス・アトウッドは 1783まで英國にいたので、ジョルダーニの曲に接することができたでしょう^{注36}。

教授：今回はモーツアルトとスコットランドの歌の関係について議論してもらい、意外な接点があることに驚いたことと思う。他に気が付いたことはあるかね。

鳥代：『フィガロの結婚』はスペインが舞台ゆえファンダンゴが踊られます、序曲の中間部の削除された自筆譜部分にはシチリアーノが書かれています。さらにこのスコットランドの歌のスケッチが自筆譜に同居しているということは、この頃のモーツアルトにさらに広い世界に出ていくための選択肢が与えられつつあったということでしょう。

犬輔：ハイドンの編曲には「ロスリン城」ハ長調 Hob.XXXIa:191^{注37}のみならず、「女王メアリーの嘆き」変ホ長調 Hob.XXXIa:161^{注38}があります。ぼくは後者が変ホ長調であることに興味を惹かれます。ジョルダーニ／テンドウッヂの曲、モーツアルトのスケッチ、ハイドンの編曲の三者を時代背景を考えながら聴き比べてみたいと思っています。

教授：多くのスコットランドの歌が編纂され今日まで残っているのは、何代にも亘る民間の出版努力の賜物だ。日本では幾つかの曲が唱歌になり明治時代から親しまれ続けている。モーツアルトもヴィーンに居ながらにしてその恩恵に与ろうとした一人であったのだ。

注 1 : モーツアルト全作品・草稿・スケッチ年代順目録 [∞](#)

注 2 : Konrad, Ulrich (1992). Mozarts Schaffensweise: Studien zu den Werkautographen, Skizzen und Entwürfen, Vandenhoeck & Ruprecht

注 3 : 前掲 Konrad (1992), p.105 [∞](#)

注 4 : Bibliorare, MOZART Wolfgang Amadeus (1756-1791). MANUSCRIT MUSICAL autographe pour Le Nozze di Figaro, [1785]; 2 pages oblong in-4 (env. 22 x 31,5 cm). [∞](#) ファクシミリは天地が逆にアップされている。

注 5 : NMA II/5/16/1-2: Le nozze di Figaro · Band 1-2, Notenedition (Finscher, 1973), p.628 [∞](#)

注 6 : Bach, Johann Philipp (1752-1846): Aria scotese con variazionne [∞](#)

注 7 : NMA III/8: Lieder, Kritischer Bericht (Ballin, 1964) p.42 [∞](#)

注 8 : A Collection of Scots Tunes, Some with variations for a violin hautboy or German flute with a bass for a violoncello or harpsichord by William McGibbon. Edinburgh: Printed and sold by R. Bremner, [1762]. [∞](#)

注 9 : A Collection of Scots Tunes for a violin hautboy or German flute with a bass for a violoncello or harpsichord by William McGibbon, with some additions by Rob[er]t Bremner. London: Printed and sold at the music shop of Robt. Bremner, [approximately 1768?]. [∞](#)

注 10 : The Traditional Tune Archive: Annotation: Rosline Castle [∞](#)

注 11 : Herd, David (1776). Ancient and modern Scottish songs, heroic ballads, etc., Vol.1, p.284 [∞](#)

注 12 : Whitelaw, Alexander (1843). The Book of Scottish Song [∞](#)

注 13 : Calliope, or the Musical Miscellany (1788) [∞](#)

注 14 : Johnson, Richard (1659). The Crown Garland of Golden Roses, Part II, p.61 [∞](#)

注 15 : Simpson, Claude M. (1966). The British Broadside Ballad and Its Music, p.141 [∞](#)

注 16 : Chappell, William (1855-56). Popular music of the olden time, Vol.1, p.178 [∞](#)

注 17 : Johnson, James (1787-1803). The Scots Musical Museum, Vol.5, p.417 [∞](#)

注 18 : Queen Mary's Lamentation. Sung by Sig. Tenducci at the Pantheon&Mr. Abel's Concert&c. [∞](#)

注 19 : Domenico Corri's Treatises on Singing: Domenico Corri's A select collection of the most admired songs, duetts, &c., Vol.3, p.71 [∞](#)

注 20 : Peres Da Costa, Neal (2012). Off the Record: Performing Practices in Romantic Piano Playing, p.199 [∞](#)
Toft, Robert (2013). Bel Canto: A Performer's Guide, p.254 [∞](#)

注 21 : The Scots Magazine, Vol. 45, p.435 [∞](#)

注 22 : The Traditional Tune Archive: Queen Mary's Lamentation [∞](#)

注 23 : The Musical Banquet of Choice Songs, 1798 [∞](#)

注 24 : Wikipedia : Tommaso Giordani [∞](#)

注 25 : The Traditional Tune Archive: Roslin Castle [∞](#)

注 26 : 神戸モーツアルト研究会 第283回例会 [∞](#)

注 27 : 神戸モーツアルト研究会 第254回例会 注28参照 [∞](#)

注 28 : 神戸モーツアルト研究会 第259回例会 13頁 [∞](#)

注 29 : ドゥシェク：「ロスライン・キャッスル」による変奏曲 [∞](#)

注 30 : Wikipedia : ヤン・ラディスラフ・ドゥシェク [∞](#)

注 31 : The John Marsh Journals: The Life and Times of a Gentleman Composer (1752-1828) [∞](#)

注 32 : Fiske, Roger (1983). Scotland in Music: A European Enthusiasm [∞](#)

注 33 : 前掲 Fiske (1983)

注 34 : Wikipedia : フランツ・ヨーゼフ・ハイドン [∞](#)

注 35 : 内藤 晃『民謡編曲バイオがベートーヴェンにもたらしたもの』 [∞](#)

注 36 : Wikipedia : トマス・アトウッド (作曲家) [∞](#)

注 37 : Haydn: Roslin Castle, Hob. XXXIa:191 [∞](#)

注 38 : Haydn: Queen Mary's Lamentation, Hob. XXXIa:161 [∞](#)

後日の談話室 —— ウクライナとモーツアルト一家

1. レーオポルト・モーツアルトの関心の的

犬輔：1784.11.12 レーオポルトからザンクト・ギルゲンのナンネル宛の手紙を紹介しましょう。

「いま、新聞がとても面白くなっています。オランダとの戦争は決定的です。皇帝の大使はデン・ハーグを、またオランダの大使はヴィーンを、別れも告げずに去って行きました。帝国軍連隊は、一部はもう進軍中だし、一部はネーデルラント〔所領の飛び地〕に向けて進軍待機中です。ハインリヒ・フォン・プロイセン公〔フリードリヒ大王すなわちプロイセン国王の弟〕は、目下パリで、兄王の全権大使を務めているとの声明を発表しましたが、フランスがオランダ人たちの援助に回るようにあらゆる策を弄することでしょう。そして国王自身は、ベーメンないしシュレージエンで皇帝を不安に陥れることでしょう。——これに対してトルコ人たちも、教唆扇動でもって、少なくともロシア人たちに対して失ったクリミア〔クリミア半島ではクリミア・ハン国が1443 オスマン帝国の属国となっていたが、1782 ロシア帝国のエカチェリーナ2世は、「ギリシア計画」にもとづいて神聖ローマ帝国のヨーゼフ2世とのあいだにバルカン半島分割の秘密協定を結び、1783に「クリミア・ハン国独立」の名においてクリミア併合を宣言した〕の復讐を試み、それによって、ロシアが皇帝を全力を挙げて援助できないようにいくらかでも妨害することは間違いないでしょう。だから、全面戦争なのです！——」。

教授：レーオポルトはオランダとの関係の悪化に伴い、神聖ローマ帝国が四面楚歌の状況になることを危惧しているが、ここでより重要なのは 1783 のロシアによるクリミアの併合だ。

鳥代：ロシアによる併合にヨーゼフ2世も絡んでいたということは初めて知りました。

教授：オスマン帝国はロシアによるクリミア併合を認めず、1787にロシアに対して宣戦布告、いわゆる第二次露土戦争となる。1788には神聖ローマ帝国も、ロシアとの協定に呼応してトルコ領に侵入した（墺土戦争）。しかし、当時の神聖ローマ帝国は所領の飛び地であった神聖ローマ帝国領ネーデルラントでの支配に対する不満の高まりや北方の新興国プロイセン王国の脅威の高まりなどに直面していた為、参戦は「これ以上不都合なタイミングがなかった」^{注39} 時期になされた。最前線の神聖ローマ帝国軍はマラリアなどの病気に襲われた。ブラウンバーレンスによると、1788の神聖ローマ帝国軍ではエピデミック〔感染症が最初に急増したコミュニティよりも広い地域に拡大すること。エピデミックが国境を越えて広がり、複数の国や大陸に拡散・同時流行した状態がパンデミック〕の様相を呈し、「ラザレット〔隔離病棟〕は満員で、軍の半分が病気であり、数千人の兵士が死亡した」^{注40}。ヨーゼフ2世は最前線にいたため病気に襲われた1人となり、1788.11に一旦帰還するも回復せず、1790.2.20に崩御した。

犬輔：1788以降ヴィーンにおける演奏会の数が減り、モーツアルトの音楽活動に多大な影響が出たのはトルコとの戦争が原因だったと聞いてはいましたが、このような経緯があったんですね。

教授：1954、クリミアはウクライナ出身のフルシチョフの指導により、ロシア・ソビエト連邦社会主義共和国からウクライナ・ソビエト社会主义共和国へと移管が行われた。1991のソビエト連邦の崩壊により独立したウクライナに属するクリミア自治共和国となった。

鳥代：2014以来クリミア半島の帰属はウクライナとロシア連邦との間で係争状態にあります。

2. フランツ・クサヴァー・モーツアルトの活躍の場

教授：フランツ・クサヴァー・モーツアルトとウクライナの関係を調査しなさい。

鳥代：フランツ・クサヴァー・ヴォルフガング・モーツアルトは、モーツアルトの末子として、1791.7.26にヴィーンで生まれました^{注41}。1795にはコンスタンツェのプラハ演奏旅行中の数か月間フランツ・クサヴァー・ニーメチエクやフランツ・クサヴァー・ドゥセックからクラヴィアを習ったといいます。

犬輔：1796にヴィーンに戻るとヨハン・アンドレアス・シュトライヒャーにクラヴィアを、ジギスマント・ノイコムに作曲を習います。そして1802には最初の作品クラヴィア四重奏曲ト短調が書かれ、1805にはヴィーンで作曲家、ピアニスト、指揮者としてデビューします。1806にヨハン・ゲオルク・アルブレヒツベルガーに師事、1807にアントーニオ・サリエーリおよびヨハン・ネーポムク・フンメルに師事しています。

鳥代：1808に職を求めてガリツィアへ出発、リヴィウ近郊のポドカミエンにあるヴィクトル・バウォロフスキ伯爵のスモランカ邸宅でクラヴィア教師として働き始めます。



図20 長兄カール・トマス（右）、末弟フランツ・クサヴァー（左）

教授：リヴィウ ルィウはガリツィア地方の中心都市で、1349以降はポーランド領ルブフ Lwów となり、同国の支配を長く受けるが、1370~1387の短期間はハンガリー領であった。1772からは神聖ローマ帝国（1804以降はオーストリア帝国）の領土に編入され、レンベルク Lemberg と呼ばれた。第一次世界大戦後の1919ポーランド領に復するが、1939ソヴィエト連邦が併合し、1991ソ連崩壊後はウクライナ領となっている。司教座教会をはじめとする多くの寺院など、歴史的建造物が残る歴史地区は1998世界遺産の文化遺産に登録された。



図21 ウクライナ地図

犬輔：1811.9からはリヴィウ近郊ブルステイン近郊のサルキでトマシュ・グラフ・ジャニシェフスキのもとでクラヴィア教師として働き、1813の初めにはリヴィウでディレッタントの歌手兼ピアニスト、ヨゼフィーネ・フォン・バローニ=カヴァルカボ Josephine von Baroni-Cavalcabò (1787-1860) と出会い、彼女のためにいくつかの曲が作曲されました。ゆくゆく彼女は彼の愛人となっていきます。そしてこの関係は母コンスタンツェも了承します。



図22 フランツ・クサヴァー・
ヴォルフガング・モーツアルト
(1825)



図23 聖ツェツィーリア
(ヨゼフィーネがモデルとい
われる) ^{注42}

鳥代：1819、ポーランド、デンマーク、ドイツ、オーストリア、イタリア、スイス、ドイツ、そして再びオーストリアを巡るコンサートツアーを実施します。ヴィーンでは1821にカール・マリア・フォン・ウェーバーに会いました。旅日記^{注43}が残されていますが、愛する女性を残して旅立った悲しみと憧れの感情が支配しているといいます。

犬輔：1822にリヴィウに戻ったフランツ・クサヴァーはバローニ=カヴァルカボ家のアパートでクラヴィア教師として働きます。娘のローラとユリー Julie Baroni-Cavalcabò (1813-87) も生徒となりました。

鳥代：1826、40人を超えるメンバーを擁する合唱団「聖ツェツィーリア聖歌隊 Cäcilien-Verein」を設立。この合唱団から彼は聖ツェツィーリア音楽同胞団を創設し、リヴィウ初の音楽学校としました（現リヴィウ国立音楽院）。

犬輔：1830、リヴィウで「音楽監督」として働きます。1834、おそらく第一指揮者としてリヴィウ歌劇場で働きました（1838まで記録されている）。

鳥代：1835、ヨゼフィーネと娘のユリー・バローニ=カヴァルカボとともにドレスデン、ライプツィヒ、カールスバート、ザルツブルク、ヴィーンを旅し、ライプツィヒでロベルト・シューマンとクララ・ヴィーアと接触。1837夏以降ヴィーンに長期滞在します。

犬輔：1838、ユリー・パローニ=カヴァルカボがリヴィウで結婚式を挙げ、ヴィーンに移住。母ヨゼフィーネ、父ルートヴィヒ・カイエタン・パローニ=カヴァルカボがヴィーンに移ったため、フランツ・クサヴァーはピアノ教師として、またパローニ=カヴァルカボ家の家庭音楽のオーガナイザーとして働きました。



図24 ユリー・パローニ=カヴァルカボ。
結婚してユリー・フォン・ウェベナウ。
作曲家・ピアニストとして活躍

鳥代：1841.12、ヴィーンでの父モーツアルト没後 50 周年を追悼する行事に作曲家兼ピアニストとして出演しました。次の年 1842.3.6 に母コンスタンツェが亡くなります。

犬輔：1842.9 にはザルツブルクのモーツアルトの立像の記念碑除幕式に作曲家、ピアニスト、指揮者として出演。《ティートの慈悲》から旋律を抜き出し、みずからその歌詞をつけて三楽章の合唱曲 Op.30 を作り上げ演奏しました。また、クラヴィーア協奏曲ニ短調 K.466 を独奏し、見事な弾きぶりに拍手喝采が続きましたが、この演奏をもって、彼は独奏ピアニストとして公開の席に現れることをやめました^{注44}。

鳥代：1844.6、教え子のエルンスト・パウラー・ジュニアを伴ってカールスバートへ湯治に出発、1844.7.29、カールスバートで亡くなりました。唯一の相続人はヨゼフィーネでした。

3. フランツ・クサヴァー・モーツアルトのウクライナ民謡による変奏曲

犬輔：フランツ・クサヴァーは 53 年の生涯のうち、1808~1838 の 30 年間をリヴィウ（レンベルク）で過ごしていたんですね。

鳥代：彼にはウクライナの民謡による変奏曲が何曲かあります。表 4 に示しましょう^{注44}。地元の文化や音楽に触れ、それが彼の作曲の一部に影響を与えたということになるでしょう。なお、ロシアのメロディとなっているのは、実質上ウクライナ民謡だと思われます。

表4 フランツ・クサヴァー・モーツアルトのウクライナ民謡による作品

作品名	作品番号
Variations in F major ウクライナ民謡「丘を走り下る荷馬車」の主題による変奏曲	Op.6
7 Variations in D minor on a Russian melody ウクライナ民謡「隣には白い家がある"U susida chata bila"」の主題による変奏曲	Op.18 (1809 ad 1820)
Variations on a Russian Theme	Op.20
Fantasy in A major, for piano on a Russian Song "Tschem tebja ja ogortschila" and a Krakowiak ウクライナの歌「このことであなたを怒らせてしまった」による幻想曲 およびポーランド舞曲クラコヴィアク	FXWM VII: 30 (1815) 幻想曲 クラコヴィアク

教授：フランツ・クサヴァーには作品番号付きの 30 曲と作品番号なしの 12 曲が残されている。とりわけクラヴィーア協奏曲（2 曲ある）は大作である。また、ディアベリのワルツによる変奏曲には 50 人の作曲家のうちの一人として参画しており、今日鑑賞できる曲も徐々に増えてきつつある。そして何よりもリヴィウで合唱団を組織し、歌劇場の音楽監督をつとめ、現在のウクライナ国立リヴィウ音楽院の前身組織を創設することにより、リヴィウを音楽文化豊かな街に育てた。これらの業績により、彼は間違なくウクライナのモーツアルトと呼ばれるに相応しい。

注 39 : Hochedlinger, Michael (2003). Austria's wars of emergence: 1683–1797. London: Longman

注 40 : Braunbehrens, Volkmar (1990). Mozart in Vienna. New York: Grove Weidenfeld.

注 41 : W. A. Mozart Sohn Franz Xaver Wolfgang Mozart 1791-1844 ∞

注 42 : Josephine Baroni-Cavalcabo (1788-1860) as Heilige Cäcilie ∞

注 43 : Angermüller, Rudolph (1994). Franz Xaver Mozart, Reisetagebuch 1819-1821, K.H. Bock

注 44 : 海老澤、敏 (1977). 『モーツアルト像の軌跡（上）』音楽之友社、248-250 頁

(作成：2024年3月27日)